

中央大学国際経営学部 企業訪問報告書

調査テーマ	日産自動車におけるEVの発展と海外戦略について
調査日	12月4日
調査先	日産自動車株式会社
担当 CVS	片岡良臣 熊崎希美 丸山航汰
授業科目/学部企画名	訪問調査「企業訪問」
参加学生数(学年)	1年生17人、2年生13人
調査趣旨・目的	横浜に本社を構える日産自動車に訪問させていただき、脱炭素社会の実現に向けたEVの取り組み、ならびに国際的な市場展開についての講義を受け、実際にEVに試乗させていただいた。
調査結果	<p>今回、神奈川県横浜市の日産自動車を訪問しました。まず始めに、EVについての講義を受けた。EVとは、リチウムイオンバッテリーに蓄えられた電力を使用し走行モーターにより走行する自動車で、自宅で充電が可能でガソリン車と比べて安価であることが特徴だ。また、加速がスムーズで耐水性に優れており、重量のある床下バッテリーにより安定した走りや静寂さを強みとする。世界でのEV販売数は1400万台で、多くの国で普及率が向上しているが、世界における日本のEV販売率は1%とまだ低い。2020年に菅元総理によるカーボンニュートラル宣言が発令されて以降、2030年までに燃料を含め100%を目指し日本でもEVに対する意識が高まりつつある。また日本政府は、課題とされている充電インフラの整備の拡大を目指している。需要が高まりつつあるEV業界で、日産は2010年に世界初の量産EVである日産リーフを発表して以降、日本国内で累計18万台以上のEVを販売し、現在まで国内のEV販売台数1位を誇る。カーボンニュートラル戦略を打ち出し、EV車種の展開の拡大を目指している。また講義では、日産独自の取り組みである「ブルー・スイッチ」についても伺うことができた。ブルー・スイッチはEVで課題解決を行う日産独自のアクションで、270の自治体と提携を結んでいる。災害などの有事の際に、EVは移動ができる蓄電池として役割を果たすことができ、年始の能登災害の際には停電地域エリアにエリアを提供し、AEDや携帯電話の6000台の充電を可能にした。また耐水性に優れていることから、水害の多い日本での需要は高い。サクラ10時間チャレンジでは、EVの給電システムを利用してエレベーターを15時間動かす実験を行った。また、自治体と連携した取り組みにも活発で、観光地でのレンタカーとして阿蘇や佐世保などの地域でEV優遇制度の提携や、地域のライフラインである乗合タクシーとしてEV社を提携するなど力を入れている。また、フェスでは静かでニオイの出ない電力源として活躍し、マラソンではCO2を排出しない先導車として重宝されている。体験会にて、給電を体験したのち、実際にEV車に搭乗したが、加速が滑らかで静かで安定した乗り心地を実感することができた。また、日産独自の技術であるe-pedalについても詳しくお話を伺ったが、従来の自動車よりも運転手への負担が少なく、高齢者などにも需要があると感じた。</p> <p>最後に、国際的な市場の中でもASEANの市場展開についてお話を伺うこ</p>

とができた。国際事業の中でも、雇用者のうちの若年層の割合が高く、1,000人あたりの自動車保有率が低いことから、ASEANは市場の伸びが期待される地域である。特に興味深かったのは、従業員の教育についての話で、現地の社員に日産の強みや販促のトレーニングを行い、現地の従業員に教育をするプロセスで、これまでの学部の授業である多国籍企業論やステイクホルダーとの利害関係と密接な結びつきがあるように感じた。

今回の企業訪問では、日産の企業概要だけでなく、環境に配慮し需要の拡大が期待できるEVについて座学と体験会を通して深い理解を得ることができた。今回の学びをこれからの学部での学びに活かしながら、自身のキャリア形成に昇華させていきたい。

(報告者: 松本慧万)

※調査時の写真



最後に集合写真を撮りました。